7．きらめく動物たちの命と海
【久保田信の白浜だより(その27)】

ハシボソミズナギドリの受難

2005 年 5 月 22 日、京都大学瀬戸臨海実験所のすぐ前の番所崎の磯浜を周回中、先端部で死亡漂着したハシボソミズナギドリ 1 羽を見つけた。本種の初確認は 2001 年に、瀬戸漁港で羽を傷めて突然落下してきた 1 羽だった。ハシボソミズナギドリは飼育できないため、白浜町役場に連絡した。その結果、獣医師に届けて治療してもらえることになった。ダメージはひどくないように思えたが、残念ながらそう長くは生きられなかった。運の悪い事故はどの生物にもあるのだ。

重なる漂着

2005 年 5 月 24 日にも、北海道からの旅行者が、番所崎でミズナギドリを発見した。「テグスがからまって動けなくなり、海辺にうずくまっていたので救助しました」と知らせてくれた。あまり元気がないものの、私たちの手をつつく元気はあった。「テグスをはずしてやる時、何度も噛まれて痛かった」とのことだった。今回も白浜町に連絡した。すると、すぐに引き取りにきて下さった。獣医師に届け看護して頂いた結果、1 週間後には自然に戻されたとのことで、ほっとした。

続く 5 月 29 日に 1 羽、5 月 31 日に 2 羽が、相次いで北浜で死んで打ち上がっていた。以上のように、5 羽のミズナギドリの受難だが、海上ではもっと多数が人知れず死亡しているのかもしれない。

ミズナギドリ類は海洋性の海鳥で、南西諸島への春の研究航海中などでは、沖合でよく見かける。はばたかないでグライダーのように滑空し、海表面すれすれに水を切るように飛んでいる。海上空高く舞い上がることはない。日本には、和名でミズナギドリとつくものが少なくとも 16 種はいる。外洋での分布や繁殖生態はよく分かっていない。

太平洋縦断の長い旅

ハシボソミズナギドリは太平洋を一周する旅鳥である。タスマニア周辺の島嶼が繁殖地で、そこから長い旅は始まる。毎年、成鳥は 3 月下旬から 4 月上旬に、幼鳥は成鳥より 1 ヶ月遅れで、それぞれ数十万羽ほどの群れで北へ向かって飛び立つ。やがて赤道を越え、我が国の太平洋岸をかすめ、ベーリング海へ到達する。北アメリカへ回った後、南下を始める。こうして太平洋の数万ｋｍを約半年間で一周し、タスマニアにもどる。このような渡りを毎年繰り返している。

ハシボソミズナギドリは海洋の表層の動物を捕らえて食べているが、繁殖地での餌不足で渡りの初期に餌を十分にとれず、栄養失調のまま旅立ったり、旅の途上、気象条件が悪く飛行・移動が妨げられ疲労が激しくなって衰弱し、京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”とその近郊海域へ、毎年ではないものの、一年の一定の時期の 5 月下旬頃、落ちこぼれが漂着する。それらのたいていは死亡する。2012 年にもこれはおこった（図）。

図　京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”に 2012 年 5 月 24 日に漂着したハシボソミズナギドリ